

十和田湖ひめますの誕生

宮本 利行

(県立百石高校
教諭)

十和田湖は火山の噴火でできたカルデラ湖で、魚類は生息していません。それは湖水が流れる唯一の河

川、奥入瀬川子ノ口から1・6キロほど下流にある銚子大滝が、魚の遡上を妨げていたからである。1845(弘化2)年、盛岡藩の調査で鉾脈が見つかった十和田銀山には、2・3千人の坑夫と、その家族が暮らす鉾山街が形成されていた。そこで住民に新鮮な

魚類を提供するため、養魚を目的に魚類の放流が試みられるようになった。本格的に取り組んだのが、十和田銀山支山長の飯岡政徳(飯岡転勤後は鈴木通貫)と、職員で養魚業務に従事することになった和井内貞行、そして銀山の住民らに食料や燃料を供給するため宇樽部に開拓集落をつくった三浦泉八だった。なお、三浦は政治家で1958(昭和33)年に農林大臣を務め

た三浦一雄(くにお)の祖父にあたった。1897(明治30)年、十和田銀山の休山で、鈴木や三浦は事業が成り立たなくなると、養魚から手を引き、和井内だけが銀山を退職し、養魚に専念した。1901(明治34)年、青森県水産試験場が奥入瀬川中流域の藤坂村相坂白上(十和田市相坂)に相坂鮭鱒人工ふ化場(県産業技術センター内水面研究所)を開設した。ふ化場がサケ・マス人工ふ化試験として移植をはかったのが、北海道阿寒湖に生息する「カパチエツポ」だった。

翌年5月、和井内は卵を人工ふ化して成長した稚魚を放流した。放流3年目の1905(明治38)年、ひめますは放流した銀山ふ化場の湖岸に群をなして帰帰し、「十和田湖ひめます」の養魚は成功した。

苦難を克服して養魚事業に取り組む和井内の一代記が、1950(昭和25)年に『われ幻の魚を見たり』で映画化されたことなどで、「十和田湖ひめます」は全国に知られるようになった。



ひめますが産卵のため帰帰する十和田湖ふ化場前の湖岸＝2024(令和6)年10月22日・筆者撮影

魚類を供給するため、養魚を目的に魚類の放流が試みられるようになった。本格的に取り組んだのが、十和田銀山支山長の飯岡政徳(飯岡転勤後は鈴木通貫)と、職員で養魚業務に従事することになった和井内貞行、そして銀山の住民らに食料や燃料を供給するため宇樽部に開拓集落をつくった三浦泉八だった。なお、三浦は政治家で1958(昭和33)年に農林大臣を務め

た三浦一雄(くにお)の祖父にあたった。1897(明治30)年、十和田銀山の休山で、鈴木や三浦は事業が成り立たなくなると、養魚から手を引き、和井内だけが銀山を退職し、養魚に専念した。1901(明治34)年、青森県水産試験場が奥入瀬川中流域の藤坂村相坂白上(十和田市相坂)に相坂鮭鱒人工ふ化場(県産業技術センター内水面研究所)を開設した。ふ化場がサケ・マス人工ふ化試験として移植をはかったのが、北海道阿寒湖に生息する「カパチエツポ」だった。

この魚はベニザケの一種で、アイヌ名でk a p a r (薄い) c h e p l p o (小魚)の意味で、海へ下らずに淡水の湖で一生過ごすようになったものだった。のちに日本語で「姫鱒(ひめます)」と命名された。ひめますは北海道水産試験場が、1894(明治27)年以降、阿寒湖(釧路市)から支笏湖(しこつこ)(千歳市)に移植させた魚種で、群遊性をもっており、一般的なサケ・マスより短期間の稚魚放流後、3年ほどで帰帰産卵する。また、食するおいしい魚と云われて

いた。移植を提案したのは、相坂鮭鱒人工ふ化場主任の上林伊三郎だった。上林はひめますの習性などに詳しく、十和田湖の水質や湖沼条件が、これら北海道の湖に類似しており、移植に適していると考えていた。そこで和井内に、ひめますの移植が有望なことを勧めた。

1902(明治35)年12月、県水産試験場は移植のため、北海道にひめます卵10万粒を依頼し、そのうち和井内は3万粒購入した。上林は和井内に発眼卵の処理方法などを説明して引き渡した。